



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「お陰さまカルマ ⑥」

カルマ論には、次の三つの作用があると考ええる。

- ①庶民のリクリエーション。
- ②宿業。過去世の行為が強調され差別につながる。
- ③未来の道徳性への誘導。本来の目的。

②宿業。過去世の行為が強調され差別につながる。

最近新著を発刊した My ボス教授がわが輩に訊ねた。

「次はガンディーの本をだそうと思うけど、どう思うか」

教授の専門外のように思えたが、先生の考えはこうだ。

「どの本を読んでも、ガンディーは聖人扱いされている。いや、され過ぎている」

もっと人間らしいガンディー像があるはずだ。それを描いてみようと思う。そのヒントは南アフリカ時代にある。

どうやら父親失格の“ガンディーおじさん”の本らしい。

この話の数日前に毎日新聞 (2019/04/14) で、間永次郎著『ガンディーの性とナショナリズム、「真理の実験」としての独立運動』についての中島岳志の書評を読んだ。

これはガンディー論を一新する本だと中島は言う。

「性」といえば、その対極にあるのはブラフマチャリヤ (性欲制御) である。それとインド独立をからめて思想根源に迫る著書だと述べている。

「晩年、側近女性と裸で寝床を共にするという行為に及んだ。これは欲望を放棄した聖者というイメージからの逸脱を想起させる」

わが輩はこの表現にギクリとした。“側近女性”、“裸”という直截的な表現であったからである。このネタは新しいものではない。かなり以前に高名な宗教学者が書いていた。E・H・エリクソン (心理学者) も指摘している。

その宗教学者から先日手紙を頂いた。

あるインド人仏教僧と 50 年ぶりに再会したが、彼はガンディーの限界を説いた。そしてガンディーに対立したアンベードカル博士の歴史的出現の必然を熱く語った、とあった。

日本ではガンディーの名を知らぬ者は少ないが、アンベードカルはまだ知られていな

い。わが輩はインドの東西南北を走り回っているが、辺鄙な田舎の村でもアンベードカルの像をよく見る。ガンディー像をはるかにうまわわっている。アンベードカルとは何者か。

アンベードカルは不可触民出身で、さまざまな差別を受けたが、のちに初代法務大臣になった人である。カーストを悪弊制度として否定することができないガンディーと対立した。ヒンドゥーの枠内に留まればカルマという「宿業」の桎梏から逃れることはできない。そこで1956年仏教に集団改宗した。

ヒンドゥー理論は「善因善果、悪因悪果」、善いことをしたら善い結果、悪いことをしたら悪い結果となる。だから、今生が不可触民なら、前世で何か悪いことをしたということになる。

仏教は「善因楽果、悪因苦果」、結果に善悪はないとされる。人を殺める行為をしたとしても、その結果は善いこともあるし悪いこともある。真に回心すれば、結果はオーライ（楽）ということになる。改心しなければ苦しみが待っている。要は結果の捉え方次第で楽にも苦にもなる。

わが輩はこの両方に納得がいかない。ヒンドゥー理論ではカーストや宿業を肯定することになる。

仏教理論ではどうか。わが輩の若いころは女性にもてた、としよう。これは、何か善いことをした行為の結果ではなく、父母の遺伝子を受け継いだだけの結果である。だから結果に善悪はない。「オレは男前に生れた」と思えば「楽」になるが、「オレはブ男だ」と思えば「苦」になる。顔はまあまあだが恵まれたことに心は清らかだと思えば「楽」になる。心の持ち方でどちらにもなる。

（そうだろうか？）

たとえば、オウム真理教事件の死刑囚が、改心あるいは回心し平安な精神を得たとしても刑務所からでられるというわけではない。やはり悪行悪果ではないのか。

このように考えるとカルマ論（因果応報）は実に不完全なものだと、わが輩には思える。このカルマが個人の行為のことなのか、社会のことなのかがよく分からない。死刑囚が回心したのは個人的なことだが、刑務所に拘束されているのは社会正義による結果である。

ガンディーにはカルマを個人的な行為とする傾向があったが、アンベードカルは社会制度の問題として認識した。インド独立で自由を獲得できるなら、不可触民解放への絶好のチャンスだとしたアンベードカルは、正に歴史的出現の英雄であった。

今日アンベードカル信奉者組織が日本・欧米にみられるが、それらは極めて限定的である。人種・女性差別、ジェンダーフリーなどとの連帯が進んでいるとは思えない。何か普遍的なものが欠けているのではないだろうか。

ガンディーの普遍的真理は、「アヒンサー」（非暴力）である。人を殺めてはいけない。世界中誰でも共感できる人間としての真理といえる。

カルマ論は不完全だとしたが、それではポンコツ理論なのかということ、そんなことはない。次号を最終章として、その本来の意味を探ってみたい。